

池上嘉彦「1. 記号の『美的機能』から芸術記号論・詩学へ」『第4章 記号論の拡がり』、岩波新書、1984年、pp.193-216.

この説では記号に内在する創造的な働きである「美的機能」についてふれる。これは記号の本質についての認識が内へ深化したものである。

【「構造」と「機能」】【「実用的機能」と「美的機能」】 pp.193-196.

言語を含む記号一般のもつ機能は大きくわけて2つに分類できる。一つは、「実用的機能」であり、これは「メッセージ」が自らの外側の者に対して、情報を伝えるための機能である。もう一つは、「美的機能」であり、これは「メッセージ」が自らの内にある価値を志向する機能である。

【「いかに伝えるか」】 pp.196-197

「実用的機能」では「何」(what)を伝えるかが問題となるが、一方で「美的機能」では「いかに」(how)伝えるか(いかなる形で伝えるか)が問題となる。「美的機能」は、たとえば、恋人に手紙を書くときの文面において、伝える内容を伝えるのみならず、より「美しく」表現したいという意識の働きの働きに示される。

【「美的機能」と創造性】 pp.197-198.

記号の「美的機能」を追求することによって記号自体が潜在的にもつ新しい意味作用が開示される。つまり、その時、記号はコード規定から解放され、それを超越し、記号それ自体がもつ自律的な側面から新たな意味を創造することになる。

【「コード」からの逸脱】 pp.198-201.

「美的機能」によってコードから逸脱した文(記号の集まり)を機能させるためには、受信者にたいして、その文が解釈を試みるに値するものとの確信をもたせる力、いわば「解釈を迫る力」が備わっていなければならない。そうでなければ、それは単なる「ナンセンス」な表現として斥けられる。

【「コード」と「メッセージ」の緊張関係】 pp.201-205.

記号の「美的機能」を通じて、記号に新たな意味作用が生みだされる時、「コード」とコンテクストに支えられた「メッセージ」との間に対立関係が生まれる。その対立関係の正当化を図るべく新しいコードが模索されるが、そこから新たな意味が創造される。このような「対立」を通じてうまれるのは「重層的な意味作用」であり、これは文学批評でいう「曖昧さ」の状態である。

また「美的機能」を通じた新たな意味作用は、記号内容に対する新たな対立関係の項が新たなコードによってうまれることにもよる。たとえば、「父」という語の記号内容は、「母」や「息子」といった全ての対立項との関係の総体であるが、そこに、新たな対立項(※例えば「祖父」)が見立てられることによって、「父」にも「子」という新たな意味作用が起きるのである。

【「異化」と「必然性」】 pp.205-206.

「美的メッセージ」(「美的機能」を志向するメッセージ)のコードの逸脱や、異常なるコンテクスト下でのその使用によって、記号には「非日常性」がもたらされる。そのことによって、通常よりも、われわれの特別な注意がその語に向けられることになる。この効果は「異化」として知られる(※ ヴィクトル・シクロフスキー、ロシア、1910年代)。先ほどふれた、主体に対する「解釈を迫る力」とは「異化」作用のふさわしさによって与えられるものである。

【「美的メッセージ」と「有契性」】 pp.206-209.

「美的メッセージ」には、本来は記号表現と記号内容との関係が「無契的」な記号を、〈自然〉で必然的な「有契的」な関係へと志向させる働きがある。それは、例えば、俳句での使用される言葉の発音の必然性(「柿食えば鐘がなるなり法隆寺」)や、リズム(「五月雨を集めて早し最上川」)に見られる。

【意味作用の豊かさ】 pp.209-211. (※「エティック」と「イーミック」の復讐も)

「美的メッセージ」は、さらに、「エティック」な性格の記号を「イーミック」な性格のものに変えるはたらきをもつ。そもそも「エティック」や「イーミック」とは、二つの事柄の相違を判断する際の視点の持ち方である。「エティック」とは分節するコードの不在を前提とする相違の判断であり、二つの事柄はコードによって意味分節されないの、たとえそれらが物理的に異なっていたとしても、結果としては常に、意味的には〈等価〉なものとなる。一方、「イーミック」とはコードの存在を前提とする判断である。したがって、コードによって意味分節されるため、判断すべき二つの事柄は、時に〈等価〉にも〈非等価〉にもなる。たとえば、自らの名前の漢字を、他人によって略字で書かれたときを考えたい。この時、たしかに、略さない字(正規の字)と〈略字〉との違いが存在する。しかし、〈正規の字〉と〈略字〉とを異なる意味として分節するコードは無いので、両者は結果として同様にある人物を示す限りで〈等価〉である。これがエティックな差である。しかし、自分の名の〈正規な字〉に愛着や強いこだわりを持つことで「美的メッセージ」となるとき、その違いを分節すべき〈新たなコード〉が生まれる。そして、そこにはイーミックな差が生じることになる。

さらに「美的メッセージ」は、その記号表現に対するこだわりがあるので、たとえば、「ばらはばらはばらはばらだ」のように反復されることがある。このばあい、「異化」によってその表現に惹き付けられることによって、それぞれの「ばら」にはそれぞれの存在感が現れることになり、それぞれを分節する新たなコードが生まれることで、各ばらはそれぞれ違う意味が生ずる。無論、この違いはイーミックな差である。

【統辞レベルでの非等価性とイディオム化】 pp.212-214.

「美的メッセージ」は言葉に対する強い〈こだわり〉がある。したがって、たとえ同じ意味をもつ二つの〈ことわざ〉でも、いわば〈こだわり〉による語への執着によって、両者は決して「等価」にはならない(例:「ネコに小判」と「豚に真珠」)。また、「美的メッセージ」は日常なことば以上に自由に「イディオム化」することが散見される(例:シェイクスピア「桜草の(咲く)道」=放蕩な生活,「自らの食む肉を嘲る緑の眼の怪物」=嫉妬)。本来、イディオム化とは、個々の語句を字義通り解釈しても全体としての意味に到達しないような状態を指す(c.f. 157-158)。しかし、「美的メッセージ」はことばそのものがわれわれの注意を惹き付けるために、個々の語句もまた意味を主張する。したがって、ここでは、表示義のレベルでの意味作用に共示義のレベルでの意味作用が重層的に様々な関係でからみあうことになる。

【意味生成の場としての「美的メッセージ」】 pp. 215-216.

美的メッセージは、意味の重層化を伴う豊かな意味生成の場として働く。そして、コードを超える新しい意味創造の仕組みを文化の諸相において追究するのが「詩学」である。